

デカルト『省察』における学問知と記憶の関係について

筒井 一穂

はじめに

デカルト哲学において「記憶 *memoria*」が主題化されるのは、大掴みに言えば、その成立のメカニズムについての生理学ないし心理学的考察、もしくは学問知の基礎づけをめぐる第一哲学的な考察、このいずれかにおいてであるが¹、本稿は後者における記憶の位置付けを精確なものとするを旨とする。学問知の基礎づけにおいて記憶が重要な役割をなし、ある意味では学問知は記憶に依存する、といった見方は、すでに初期著作『精神指導の諸規則』(以下『規則論』と略称)に見られ、その点は部分的には主著『第一哲学についての省察』(以下『省察』)の「反論と答弁」などにも確認できる(該当箇所は後述 1.1)。つねに時間的経過のもとでなされる学問探究において、しかし精神は同じ事柄に注意を向けつづけることができず、それゆえに論証の前提なり先立つ論証の結論なりを、記憶と想起に委ねざるをえないからである。ところが、何かを眼前で明証的に認識することと、過去に明証的に認識したことを想起することとは、事柄としても経験としても異なっている。デカルトのいわゆる明証性の規則は本来のところ現在の明証性にかんするものであるから、それに基づいて、過去の明証性が同じように事柄の真理性を伝えると考えることは直ちにはできない。かくて、過去の明証性の妥当性とも呼ぶべき問題が、ここに生じることになる。

ところでこうした問題は、デカルト研究においては古くから盛んに研究されてきた主題のひとつであるが、本稿の関心は先行研究とは異なる。粗削りに言えば、『省察』の記憶論は20世紀初頭以来いわゆる「デカルト的循環」の問題系において注目されてきた(cf. Hamelin 1911; Gilson 1925; Doney 1955)。しかし1960年代には記憶と循環との関わりのなさが指摘され(cf. Frankfurt 1963)、さらには20世紀後半から末葉にかけて循環そのものを疑似問題とみなす立場が主流となるにつれ(cf. Gouhier 1962; Rodis-Lewis 1971; Beyssade 1979; 山田・香川 1992; 村上 1995;

Marion 1996)、次第に記憶をめぐる議論は『省察』においては副次的な問題として位置付けられるようになってきている。こうした現状において本稿が目指すのは、循環問題云々にはもはや関与せず、『省察』において学問知が記憶に依存するその仕方を明らかにすることである。結論としてわれわれは、『省察』において習慣ないし習得態として捉えられた記憶の働きが、学問知の獲得および蓄積にとって不可欠のものとして見出すに至るが、これはデカルトにおける学問知の構造を解明する上でも、『規則論』について言われる「習得態の拒絶 *refus de l'habitus*」²との距離を測る上でも、注目すべきものであるだろう。

1. 学問知の蓄積における記憶の役割—いくつかのメタテキストを足場として

1. 1 問題の発端—学問知の蓄積における記憶の役割

記憶の問題を論じるにあたって、まずその問題が浮上してくる経緯を詳細にしておかねばなるまい。とりわけわれわれが関心を寄せている学問知と記憶とのかわりにかんする議論は、カノニックなテキストとしては『省察』『第五省察』に端を発するが、そこからいくつかのメタテキストに波及し、詳論されることになる。われわれは、解釈者の関心を惹きつけてきたこれらのメタテキスト群をまずは分析し、そののちに次節で「第五省察」へと遡る。

まずは、記憶と学問知との関わりが論じられるメタテキストにおいて、学問知がいかなる問題系のなかで扱われているのか、その枠づけを確認しておこう。いくつかのメタテキストにおいて、学問知はおよそ次の三つの対比を軸として語り出される。第一に、推論過程と結論との対比において、その結論についての知が学問知と呼ばれる。「第二答弁」においてデカルトは、「原理 [について] の知 *notitia principiorum*」と「結論 [について] の学問知 *scientia conclusionum*」とを区別しており、いわく、原理の知はふつう学問知とは言われないのであって、「第五省察」において想定されている学問知は結論についてのものである (cf. AT VII, 140, 12–18)。ところで結論の学問知とは、その名の通り、「それにかんする記憶が、もはやそれら結論を演繹したその根拠にわれわれが注意していないという場合に舞い戻ってくるということがありうるようなもの」(140, 15–16)、すなわち推論過程を再考することなしにも学問知と認められるような資格をもった知である。第二に、

循環との関連において、現在の明証知と明証知の記憶とが区別され、学問知は後者にあたる。「第四答弁」では、「実際に明晰にわれわれが知得しているもの」と、「われわれがかつて明晰に知得したことがあると想起するもの」とが区別され、後者のみが神の保証を要するとされる（AT VII, 246, 3-9）。第三に、疑いの余地を残す説得知（*persuasio*）と確実な学問知との対比がある。レヒウス宛書簡（1640年5月24日）では、「神が実在すること、そしてこの神が欺くものではないことを説得させる根拠を一度でも明晰に知解した者にあつては、その根拠に十分な注意を向けていない場合でも、「神は欺くものではない」という結論を思い出しさえすれば、たんなる説得知ではなく、この結論にかんする学問知ならびにその理由を一度でも明晰に認識したことを記憶しているあらゆるほかの結論にかんする学問知が、その者の精神にとどまることになる」（AT III, 65, 8-15）と言われる。

学問知をめぐる以上三つの対比について、その全体としての異同ならびに一貫性にかんしてはいまは措くとして、さしあたりそこで論じられる学問知概念の枠づけを示す点を、最低限次のふたつのみ指摘する。第一に学問知は、過去に明晰に認識されたということの想起を要求するものである以上、その成立において記憶に深く関わる。そのかぎり、学問知は「ある意味で記憶に依存する」という『規則論』以来のテーゼがここに見出されうると言っても良からう（第十一規則、AT X, 408, 7-8）³。第二に、この三つの議論はどれも、時間の流れのなかでわれわれが実際におこなう学問実践において生じる問題を念頭に置いている。言い換えれば、一眼には見通すことのできないような長い論証を吟味したり、ある学問知から別の学問知を導出したりすることで、少しずつ学問を進展させていく、そのような知の蓄積の可能性を拓くことが目指されている（cf. 村上 1990, 89-90; 94）。そこで記憶は、学問知の蓄積のために、移り気な精神を補助するために働く。

1. 2 記憶の信憑性にかんする問題とその解決—『ビュルマンとの対話』から

上述のように、学問知はその蓄積にさいして記憶に依存する。そこに、長きにわたり解釈者たちが見出し続けてきた問題の発端がある。それは、この記憶が果たして信用できるのかどうかという問い、すなわち記憶の信憑性にかんする問いである。われわれは、日常生活においてさえ、重要な事柄についての記憶違いをしばしば経験する。まして、疑わしいものをすべて拒否する厳しい吟味をデカ

ルトと共に行なってきた『省察』の読者にとっては、記憶を素朴に信頼することへの抵抗感はひとしおである。記憶の正常な働きが学問知の蓄積のために必須であるなら、この問題は『省察』の根幹を揺るがしかねない。このような問題は、Hamelin (1911) や Gilson (1925) や Doney (1955) らによってすでに提起されている。ここではこれらの解釈を括って、「古典的解釈」と呼称する。それによると、目下の問題の焦点はわれわれの記憶の不確かさにある。一種の直観として与えられる現勢的な明証性 (*évidence actuelle*) には誤りの可能性はないとしても、過去の明証性には、それが記憶として呼び出されるかぎり、常に記憶違いの可能性があり、その可能性をいかに排除するかが重要となる。問題をこのように捉えたいうえで、古典的解釈は、記憶の正しさを誠実なる神が保証すると考えることで、これを解決しようとする。

古典的解釈をめぐるのはさまざまな論争があるが、われわれは、メタテキスト群において反論者によって提起されている記憶の問題の捉え方というかぎりでは、この解釈を採用する。事実、その点にかぎってはこの解釈以上にもっともらしいものは考えられないからである⁴。もっとも、それは古典的解釈の提示する解決までをも受け入れることを含意しない。すぐに述べることになるが、しばしば古典的解釈の批判者たちが指摘してきたように、記憶違いの問題はデカルトにとって、神に訴えずとも解決可能なものである。

記憶の信憑性をめぐる問題の解決は、『ビュルマンとの対話』の一節においてきわめて簡潔な仕方で与えられている。質問者ビュルマンは、神の誠実性の論証を踏まえた上で、「知能はわたしを欺くことはない」としても、「記憶がわたしを欺く」のではないかと問う。「なぜなら、実のところ思い出してもいないものを思い出しているかのようにわたしに思えるからであり、つまり記憶はあてにならないものだからである」。これに対してデカルトは、「記憶についてわたしは何も言うことができない」と突っぱね、「各人が正しく思い出すかどうかは、めいめいが自分で経験しなければならないことだからである。そしてもしそれについて疑わしいならば、文字やそれに似たもので、かれの助けになるものが必要である」(AT V, 148; Descartes 1981, 21) とのみ応じる。

ビュルマンの疑問は、われわれのものと同様である。デカルトの答弁は驚くほど簡潔であり、記憶の正しい使用については各人の経験に委ね、場合に

よってはメモを取ることを推奨する。これが記憶違いへのデカルト的対処である以上は、そこに神の保証といった大掛かりな議論を持ち出す古典的解釈はたしかに誤っているはずであるが (cf. 山田・香川 1992, 42; 44)、だとしても、これほど簡潔な仕方では記憶の信憑性への疑義が解消されうるのはなぜなのか。

ビュルマンのように記憶の信憑性を疑う場合、およそ次のふたつの水準における疑いが可能である。第一に、記憶の能力がその創造者の欺瞞的な意図のもとでわれわれに与えられたものであり、われわれを欺くようにできているのではないかと、との疑いであり、これは概ね「第一省察」の欺く神の懐疑に相当する。第二に、記憶の能力はなんらかの好ましい条件下では正しく作動するようできているが、しかしその条件がわれわれには明かされていないのではないかと、との疑いであり、これは一般的な懐疑主義の伝統における標識問題に相当する。

ところで、本稿はあくまで記憶の問題に焦点を当てたものであるから、欺く神の懐疑はすでに「第三省察」における神の誠実性の論証によって打破されたものとみなし、その論証の成否については立ち入らない。そのかぎりでは、記憶能力に関する第一の疑いが生じる余地はない。同じことを別の仕方と言えば、記憶能力がその起源に誠実なる神を有することから、この能力はわれわれの知性認識の能力や判断する能力などと同様に、善用される場合には常に正しく働くという知見を得ることができる。それゆえ残るは、記憶能力を善用しているかどうかについて、われわれに認識可能な標識が与えられるかどうかという第二の疑義のみである。デカルトがこの標識を何らかの仕方では獲得可能であると考えていたことは『ビュルマンとの対話』におけるやりとりからも明らかであるにもかかわらず、テキスト上それが明確に打ち出される箇所はない。もともと、記憶を覚えることと想起することと二分して観るならば、前者については、明晰判明に知得されたことについてのみ判断を下しその判断を記憶するよう努めることで過ちを避けることは可能であるように思われるが (cf. AT VII, 62, 8–20)、やはり後者についてはやはり手がかりが少ない。しかしデカルトの記憶論を研究した Kieft (2006, 777–778) は、想起における正誤の判断基準を、想起される事柄の整合性に求めることができるとする。つまり、想起とは過去に獲得された観念を同一のものとして保持し続ける働きではなくて、そのような観念を抱いたさいの思考の文脈の全体を再構成する働きであり、その文脈には、知性認識、想像、感覚といった諸々の能力が

関与している。こうした文脈のなかで、もろもろの能力が見出すもののあいだに相反するものがない場合、すなわちそれらが整合的である場合、われわれは正しく想起している (cf. AT VII, 90, 7-10)。

デカルトの簡潔な回答と Kieft の解釈とを合わせてみれば、記憶の信憑性を必然的な仕方と判定する基準は与えられずとも、それほど深刻な影響を学問探究にきたすことはないと思ふことができる。記憶の整合性をその都度各人が個人的に確認することで、ほとんどの場合は問題を回避できるからである。こうして、上記のメタテキスト群における記憶の問題とは記憶の信憑性の問題であり、それは記憶の整合性についての個々人の確認作業、およびメモのような外部装置に記憶を委ねることによって解消される。さて、記憶の信憑性をめぐる問題が一応の解決を見たいま、われわれは、こうした問題と解決とをそのまま「第五省察」に持ち込むことができるかどうかを吟味しなければならない。

2. 「第五省察」における記憶の問題

2. 1 問題の取り逃がされた焦点—記憶をめぐるふたつの問題

「第二答弁」の上述の議論がそこから直截に由来する「第五省察」の箇所を見よう。そこでデカルトは、神のア・プリオリな実在証明を遂げた直後、「ひとりそれのみの本質に実在が属しているところの神が実在する」というまさにこのことに「ほかの事物の確実性が依存していて」、「このことなしにはなにもものも完全に知られることは決してできない」と述べた上で、神を知らないとしたらどのような不都合が生じるかを反事実仮想的に説明することによって、そのような基礎づけの関係が成り立つ所以を説明する。

というのは、なにかをきわめて明晰判明に知得しつつあるかぎりでは、それが真であると信じないではいられない、という本性をわたしはもっているのではあるが、そうだとすると、しかしわたしは、精神の眼を同じひとつの事物に、明晰にこれを知得するために、常に据えていることができなくて、もはやわたしが、なにかをそのようなものと判断したその根拠に注意してはいない、という場合には、以前に行われた判断の記憶がしばしば舞い戻って

くる、という本性をもつていられるから、他の根拠が提示され、そしてそれらがわたしをして、神をわたしが識らないとしたならば、容易に意見を転向させることとなり、かくして、いかなる事物についてもわたしは、けっして真にして確実な学問知をもたず、移ろいやすく変わりやすい意見のみをもつことになる、ということもありうるからである。(AT VII, 69, 16-26)

この引用部において想定されている記憶とは、過去に行われた判断の記憶であるが、これが現在の判断を揺るがしにするとされているのだから、その内容は現在の判断の内容に相反するものである。ところで、明晰判明な知得は真であり、かつ明晰判明なもろもろの知得は相互に矛盾しないものであると言えるのだから (cf. 村上 2009, 64-75)、問題となっている過去の判断は、偽なる判断である。ここから、過去ということで想定されるべきは、「第一省察」から「第四省察」において、決して疑わしくないもののみ同意してきた省察の日々ではなく、むしろ省察に取り組む以前に、謬見すなわち先入見を無思慮に受け入れてきた日々であるとわかる。そしてそうした記憶によって、一度は学問知であるかのように思われたものが、移ろいやすい意見へと転落することが懸念されている。

さて、ここでわれわれは今一度、先行研究による記憶の問題の捉え方を振り返ってみよう。古典的解釈をはじめ多くの研究は、原理を再認識することなしに結論だけを学問知として受け取ることができるのはなぜなのか、という記憶の信憑性の問題が、そのまま「第五省察」の上記の議論にとっても核心的であると見ており、これを基本的な枠づけとして各々の解釈を練り上げている (cf. 山田・香川 1992)。だが、この枠づけははたして『省察』の記憶論の核心を突いているのだろうか。そのように疑義を抱くのは、上で見た「第五省察」の議論は、明らかに結論の知としての学問知の成立云々とは主題的には関与しないものだからである。「第五省察」の議論の要点は、端的に言って、記憶の信憑性ではなく、記憶の舞い戻りである。つまり、偽なる意見についての記憶が舞い戻るとき、それを斥けることができないという状況が仮想されている。これは記憶は正しく過去の事柄を想起し、なおかつしかしその想起される事柄が誤っているという状況なのだから、そこで記憶の正誤が疑われていると考えるなら問題そのものが破綻する。こうしてわれわれは、メタテキストに見出される記憶の信憑性についての問題は

あくまで反論に対する答えとして提示されたものにすぎず、「第五省察」における本来の問題とは別箇のものであると考えるに至る。言い換えれば、記憶の信憑性が疑われる場面は「第五省察」にはないということである。

2. 2 古い記憶の舞い戻りによる懐疑とその解消

しかし、記憶の舞い戻りをめぐる問題とはどのようなものか。「第五省察」の引用箇所をそれ自体として読むならば、ごく概略的には、次のように理解するのが最も自然であるだろう。(1) かつてわたしは、 $\sim Q$ という命題を教師に教えられ、これを真だと信じた。(2) 省察の日々を経て、さきほどわたしは、 $P \rightarrow Q$ という推論を明晰判明に知得した。(3) 今現在、わたしは Q のみに注意を向け、かつ「その根拠を明晰判明に知得した」ということを記憶している。(4) $\sim Q$ が真だと教師の教えゆえに信じたことがある、という記憶が不意に舞い戻る。(5) わたしは神が誠実であることを知らない。すなわち、明晰判明に知得されたものが真であることを知らない。(6) 知得の明晰判明性と、教師の教えと、どちらを信じるべきか決断できない。かくて懐疑状態に陥る。

全体として反事実仮想的に書かれた以上の議論の行き着くところは懐疑状態である。これは、同程度にもっともらしい根拠から導かれたふたつの反目する結論のうち、どちらを選ぶこともできず、判断保留に至るといって、懐疑主義者の用いた「反目を論拠とする方式」と呼ばれる懐疑方式に収まるものである (cf. Annas & Barnes 1985, Appendix C, 182)。ここで疑われているのは、わたしが Q を明晰判明に知得したことを想起する手続きの正否ではない。疑われているのは、知得の明晰判明性とその知得内容を信じる根拠になるという考えである。つまりここでは、問題は明証性の規則の成否に帰着するのであって、結局は記憶が問題となっているわけではないのである。記憶は、それを問うために動員されたのではなく、それによって明証性の規則を問うために動員されている。議論における記憶の役割は、一連の推論プロセス全体を眺める明晰判明な知得に、教師の教えがつけいる隙を作るために推論プロセスについての知得を結論についての知得から切り離すことにあり、それ以上ではない。

「第五省察」の例の箇所が、結局は明証性の規則の有効性の問題へと折り返されるという以上の解釈が正しいならば、記憶の舞い戻りの問題を解決するのは難

しいことではない。幼い頃からもろもろの（偽なる）意見を信じてきた根拠は、あるいは自身よりも権威ある人物に教えられたことにあり、あるいは思慮を欠いていたことにあるのだろうが、いずれにしても、そうした根拠を、知得の明晰判明性でもってオーバーライドするだけで十分だからである。知得の明晰判明性が神からの賜物という仕方でも優先権を与えられるかぎり、明晰判明に知得された事柄に背反する意見が当の知得の信頼性を脅かすことはない。したがって、明証性の規則の妥当性を前提してよいなら、すでにそのことによって、古い意見の舞い戻りをきっかけとする懐疑は封じられているとすることができる。

以上の解釈が正しいならば、「第五省察」とその他メタテキストにおける記憶の問題を次のように整理できる。まず、「第五省察」において疑われているのは記憶能力ではなく明晰判明な知得の真理性であって、記憶によって舞い戻り古い意見がその疑いの理由にあたる。他方メタテキストにおいては、現在の明証知と過去の明証知が対比されたことをきっかけに、記憶と想起の能力をめぐる疑念が惹起されたわけだが、これはデカルトにとって本格的に取り組むべき問題ではない。個人の経験と対策によって克服可能な問題だからである。

3. 学問知の蓄積と記憶の矯正— ‘consuetudo’ から ‘habitus’ へ

以上の解釈においてわれわれは、過去の判断を現在の思惟に対して再現し、それが呼び起こす記憶内容の真偽に応じて益なり害なりをもたらすような媒介者として記憶を解してきた。「第五省察」において提示されていたのは、この害に対抗することが明証性の規則によって可能となるという議論である。だが、これだけで『省察』における記憶と学問知の関係を論じ尽くすことはできない。このうえ求められるのは、記憶の働きの由来についての考察である。そこまで遡ることで始めて、記憶が益なり害なりを引き起こすその仕組みが明らかとなり、さらにはより多くの益を引き出すことができるように記憶を矯正することが可能となるからである。

『省察』において記憶の由来がはっきりと語られるのは、「第一省察」である。そこでデカルトは、これら意見の疑わしさを方法的懐疑によって看破した直後、しかしその疑わしさに「気づいた *adverto* というだけではまだ十分ではなく、記憶

に留めておく recorder ように気を配らねばならない」と警告する。なぜなら、「習癖となっている *consuetus* 意見というものはたえず舞い戻ってきては、いわば長い間の慣用と馴染みという特権によってこの意見に固着させられているわたしの信じやすい心を、ほとんどわたしの意に反してさえも、占拠してしまうものだからである」(AT VII, 21, 27-29)。ここで注目すべきは、意見の舞い戻りという事態が、「習癖 *consuetudo*」によって引き起こされているという洞察である。言い換えればここでは、記憶の問題は、それを起因している習癖という観点をとって論じられているのである。古い意見というものは、単にかつて一度承認されたというだけでなく、これまでの人生のなかで幾度か繰り返し承認され使用されてきたという習癖によって私の精神に沈着したものである。そのため、こうした古い意見の記憶は、単に一度その疑わしさに気づくというだけでは払拭されることはない。このことについて理解を助けるために、記憶を成立させる身体的メカニズムについての『人間論』の説明 (cf. AT XI, 177, 23-178, 14) を参照しよう。松果腺に観念が「刻印」されると、そこから出てくる動物精気によって、その刻印に対応する形象が脳中に描かれるが、この形象は、精気の運動がより強く長いほど、そしてより多く繰り返されるほど、いっそう完全に描かれる。そのように完全に描かれた形象は容易には消えないので、当該の形象は、対象の現前・不在に関係なく、脳中に一定期間保存される。また、一度精気が流れた道は、以後は比較的弱い精気によっても開かれやすくなっているために、類似の形象は回を重ねるごとに描かれやすくなる。以上が、デカルトによる記憶の成立構造についての基本的な説明である (cf. Landormy 1902; Fóti 2000; Kieft 2006; Sutton 2016)。身体を必ずしも前提しない「第一省察」においては、反復によって記憶が固着する身体的プロセスを括弧に入れたまま、これが習癖として論じられていると考えることができる。

古くからの意見は習癖によって強く私に根ざしているから、これを完全に斥け、「それらの意見に同意し信頼を置くという習癖からわたしが脱け出す」(AT VII, 22, 7-8) ためには、その疑わしさに気づくだけでなく、これを記憶にとどめることが必須である。だが、そうした「骨の折れる仕事」をデカルトはその実どのように行っているのか。ふたたび記憶の身体的成立過程についての知見が手がかりとなる。身体においては、記憶を引き起こすのは、精気の流れの強さとその反復頻度である。このふたつの要因にパラレルに対応する仕方で、『省察』は記憶の矯

正を試みている。第一に、「第一省察」においてデカルトは、こうした意見のすべてが偽であるかのように仮想するよう「意志を正反対の方向に振り向け」、「いわば自らを欺いて」、それらに対する「不信を逞しく」する（AT VII, 22, 12–15）よう努めている。また、「第二省察」の末尾でもデカルトは、「古くからの意見の習癖はそう速やかに捨てることはできないから、深く深くこの新しい認識が私の記憶に時間をかけた省察によって刻み付けられるよう、この場に踏みとどまるのが良いと思う」（AT VII, 34, 6–9）と述べ、新しい認識をゆっくりと咀嚼する。こうした記述は、習癖に刻まれた意見に対して、新たな知見を対抗させるべく、よりいっそう強い精気の流れを生み出すような努力として読まれうる。

第二に、新たな知見を繰り返し確認することで、精気の反復的な流れを生み出し、習癖そのものを塗り替えようとする試みが、広く『省察』の全体に確認できる⁵。「第四省察」冒頭では、これまでの省察を振り返り、習癖となってきた意見から「身を引き離すことによくみずからを慣らしてきた *assuefacio*」（AT VII, 52, 23–24）と言われる。この一節は、「第一省察」以来、デカルトが疑いの論拠を反復しながら進んできたことを意味している。そして、その「第四省察」においてデカルトは、「明晰判明に知得されたことについてのみ判断を下す」という「過誤を差し止める」ための指針を見出し、これに厳格に従うことで、「過たないためのある種の習得態 *habitus quidam non errandi* を獲得する」（*Med.* 4, AT VII, 62, 6–7）よう自らを促していくことになる。以上の一連の議論は、古い意見が疑わしいものであることをはじめ、省察のなかで見出された新たな知見を自らのうちに定着させるための反復的・習慣的プロセスを語り出している。その場合の習慣は、もはや無思慮に受容された「習癖」とはちがって、自ら自身によって獲得される「習得態 *habitus*」である。過たないための習得態の獲得こそ、古い記憶を排除するとともに、新たな知見を自らのうちに定着させるための、具体的な手続きとして見出されることができるのである。

習得態に関する以上の議論は、「第五省察」の記憶の問題解決において実際になされていることを明らかにする。デカルトは、明証知と齟齬をきたすような古い意見が舞い戻る場合、これを偽ないし疑わしいものとして否定する。この否定は、単に知的な考察によって一回限り行われるのではなく、むしろ強く心に留められ、そして何度も反復されることによって、記憶にあらためて刻みなおされる。こう

して、われわれは学問知をある種の習得態において獲得する。古くからの習癖からの脱却は、われわれの貧弱な注意力が持続するかぎりにおいてのみひらかれる、いかなる習癖の影響も及ばない形而上学的な領域に避難することによってではなく、むしろ、悪しき習癖を好ましい習慣へと置き換えることによってなされるのである。

結論と展望

本稿の議論をまとめよう。われわれはまず、「第五省察」とそのメタテキスト群とにおいて、記憶はそれぞれ別箇の問題を惹起するという立場をとる。メタテキスト群においては記憶違いが問題となるが、これは記憶の整合性を基準とするその正否の吟味という個人的な経験によって解決される。「第五省察」においては記憶違いではなく、むしろ記憶による過去の意見の舞い戻りが問題となるが、これは明証性の規則の確立とともに斥けられ、デカルト哲学にとって記憶が疑われその保証に神の誠実を要するという事態は成立しないことが明らかになる。さらに重要なことに、「第五省察」における記憶の議論が、「第一」・「第二省察」における習癖の自覚および「第四省察」における習得態の獲得の延長線上にあることが確認され、学問知はその成立において習得態に由来する記憶にある仕方依存するということが示された。こうしてわれわれは、学問知と関わるかぎりでの記憶の問題から出発し、習得態の議論へと逢着することになる⁶。

以上の結論は、デカルトにおける学問知と習得態との関係についてのさらなる考察を促すものである。冒頭で仄めかしておいたように、『規則論』においてデカルトがいわゆる「学問的な習得態 *habitus scientiarum*」を拒否していることはよく知られているからである。『規則論』と『省察』とにおける習得態概念ないしデカルトの立場の異同を解明すること、あるいは『規則論』の読解そのものを吟味することなどが、今後の課題として残されることとなる。

¹ 記憶についての生理学的・心理学的考察は、『人間論』(AT XI, 174–185)、1640年1月29日メイソニエ宛書簡(AT III, 20, 4–20)、1640年4月1日メルセンヌ宛書簡(AT III, 47, 19–48, 29; *Studium Bonae Mentis*, AT X, 200–201)、1640年6月11日メルセンヌ宛書簡(AT III, 84, 19–85, 2)、1640年8月6日メルセンヌ宛書簡(AT III, 143, 3–13)、1644年5月2日メラン宛書簡(AT IV, 114,

17-115, 2)、1648年7月29日アルノー宛書簡(AT V, 219, 19-220, 29)などに見られる。これについての研究は多くあるが、一例としてLandormy (1902)、Joyce (1997)、Sutton (2016)などを参照。

² 『規則論』の該当箇所は、「第一規則」冒頭(AT X, 359, 8-360, 13)。また、これを強調したのはMaritain (1932)、およびDescartes (1977)におけるMarionによる注。

³ ただし、『規則論』の該当文の主語は「その確実性」であり「その」は「演繹 deductio」を受ける。この場合、学問知にせよ演繹にせよ、直証知と区別されるかぎりの推論知としての側面が引き出されているため、同一視して差し支えない。なお、直証知と推論知との区別にかんしては、所(1981, 327-328)を参照した。

⁴ 古典的解釈をめぐる論争の詳細については、山田・香川(1992)に詳しい。典型的な批判としては、過去の明証性が現在の明証性とは異なるものであるとし、その点に記憶の問題の焦点を認めるLachière-Rey (1937)と、永遠真理創造説を援用し、過去において真であった事柄が現在においても真であるとは限らないと指摘するBréhier (1937)がある。Bréhierは、しかし永遠真理創造説の解釈において誤っている(これを指摘したのは小泉(2009))。また、筆者自身の永遠真理創造説にかんする解釈は、筒井(2001)を参照)ため、有効な代案とはならない。Lachière-Reyは、その実古典的解釈からの暖簾分けに失敗している。記憶が常に正しいとすれば、Bréhierのように事柄の側の変化を認めるのでなければ、過去の明証性に現在の明証性と異なるところはないからである。

⁵ 「第四省察」の「習得態 habitus」論が記憶の議論に適用されるべきであることについて、村上(1990, 97-99)を参照した。

⁶ 学問知の成立にとって記憶が積極的な役割を果たすという点、そのような記憶論が習得態の議論へと展開される点については、すでに望月(1992)が指摘している。われわれは、解釈の大筋としては望月に沿う。しかし、望月がその解釈を導く作業の実際の足場としているのは書簡をはじめとする周縁的テキスト群であり(望月 1992, 136-146)、『省察』のテキストはあくまでも考察の動機として提示されるにとどまるうえ(133-136)、その実質的な分析はもっぱらBeysadeの仕事に依拠している(145)。その点で本稿とは異なる関心のもとに展開された研究であると言うことができよう。

参考文献

デカルトのテキストの引用はすべて下記Adam & Tannery版に基づく。引用の際は慣例にしたがい、これをATと略記し、巻号をローマ数字で、頁数・行数をアラビア数字で記す。『規則論』と『ビュルマンとの対話』にかんしては下記の校訂版をそれぞれ参照した。

Descartes, René. 1996. *Œuvres de Descartes*, Charles Adam and Paul Tannery (Eds.), Vrin.

——— 1977. *Règles utiles et claires pour la direction de l'esprit en la recherche de la vérité*, Jean-Luc Marion (traduction & annotation), Martinus Nijhoff.

——— 1981. *L'Entretiens avec Burman*, Jean-Marie Beysade (édition, traduction et annotation), Presses Universitaires de France.

——— 2001. 『デカルト著作集 増補版』, 三宅徳嘉他訳, 全4巻, 白水社.

——— 2004. 『デカルト『省察』訳解』, 所雄章訳・注, 岩波書店.

——— 2012-2016. 『デカルト全書簡集』, 山田弘明他訳, 全8巻, 知泉書簡.

Annas, Julia & Barnes, Jonathan. 1985. *The Modes of Scepticism: Ancient Texts and Modern Interpretations*, Cambridge University Press.

- Armogathe, Jean-Robert & Carraud, Vincent. 2003. *Bibliographie cartésienne (1960–1996)*, Centro Interdipartimentale di Studi su Descartes e il Scicento, Conte.
- Beyssade, Jean-Marie. 1979. *La philosophie première de Descartes*, Flammarion.
- Bréhier, Émile. 1937. La création des vérités éternelles dans le système de Descartes, *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, 123, 15–29.
- Doney, Willis. 1955. The Cartesian Circle, *Journal of History of Ideas*, 16 (1), 324–331.
- Dubouclez, Olivier. 2019. Méditation cinquième, *Les méditations métaphysiques objections et réponses de Descartes : un commentaire*, Dan Arbib (direction), Vrin.
- Fóti, Véronique M. 2000. Descartes' Intellectual and Corporeal Memories, *Descartes' Natural Philosophy*, S. Gaukroger, J. Schuster, and J. Sutton (Eds.), Routledge, 591–603.
- Frankfurt, Harry G. 1963. Memory and the Cartesian Circle, *The Philosophical Review*, 71 (4), 504–511.
- Gilson, Etienne. 1925. *Discours de la méthode, texte et commentaire*, Vrin.
- Gouhier, Henri. 1962. *La pensée métaphysique de Descartes*, Vrin.
- Hamelin, Octave. 1911. *Le système de Descartes*, Félix Alcan.
- Joyce, Richard. 1997. Cartesian Memory, *Journal of the History of Philosophy*, 35, 375–393.
- Kieft Xavier. 2006. Mémoire corporelle, mémoire intellectuelle et unité de l'individu selon Descartes, *Revue Philosophique de Louvain*, Quatrième série, 104 (4), 762–786.
- Lachière-Rey, Pierre. 1937. Reflexions sur le cercle cartésien, *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, 205–225.
- Landormy, Paul. 1902. La mémoire corporelle et la mémoire intellectuelle dans la philosophie de Descartes, *Bibliothèque du Congrès Internationale de Philosophie*, 4, 259–298.
- Marion, Jean-Luc. 1996. *Questions cartésiennes II*, Presses Universitaires de France.
- Maritain, J. 1932. *Le songe de Descartes*, Buchet / Chastel.
- Rodis-Lewis, Geneviève. 1971. *L'Œuvre de Descartes*, Vrin.
- Sutton, John. 2016. Memory, *The Cambridge Descartes Lexicon*, L. Nolan (Ed.), Cambridge University Press.
- 小泉義之. 2009. 「デカルトにおける数学の懐疑 (II)」, 『デカルトの哲学』, 人文書院.
- 筒井一穂. 2021. 「神は真理を変えうるか」—1630年のデカルトの永遠真理創造説を再考する, 『フランス哲学思想研究』第26号, 215–226.
- 望月太郎. 1992. 「“精神のハビトゥス”考——デカルトの記憶論をめぐる」『徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)』27, 129–145.
- 村上勝三. 1990. 『デカルト形而上学の成立』, 勁草書房.
- . 1992. 「第五省察」におけるアプリアな神証明についての諸解釈, 『デカルト「第五・第六省察」の批判的註解とその基本的諸テーマの問題論的研究』, 平成三年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書, 所雄章(代表者).
- . 1995. 「保証された記憶と形而上学的探究—デカルト『省察』の再検討に向けて」, 『哲学』, 第45号, 日本哲学会編, 87–100.
- 山田弘明、香川知晶. 1992. 「デカルト的循環をめぐる」, 『デカルト「第五・第六省察」の批判的註解とその基本的諸テーマの問題論的研究』, 平成三年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書, 所雄章(代表者).